

# ルネサンス期の演劇教育の考察

—俳優と貴族階級の関係発展を中心に—

山崎 明日香

## 1. はじめに：都市における俳優の文化的な媒体機能

ルネサンス期の人間中心主義の展開は、リベラルアーツの再評価を導いた。建築や絵画が科学的な対象として議論され、これらの技芸は人間が追求すべき実用的な芸術として認識された。その反面、演劇文化への学術的な関心はまだ十分に高まっておらず、芸術として認識されていなかった。とはいうものの、イタリアの人文主義の思想家ジュリオ・カミッロ（Giulio Camillo, ca.1480-1544）は、自身の劇場論『劇場のアイデア』（*L'Idea del Theatro*, 1550）の中で、演劇を世界の叡智を得るトポスと表現し、演劇の有用性を認識した。演劇は中世以降、反道徳的な場として宗教的な弾圧を受けていたが、そうした否定的な観念を次第に脱しつつあった。

この時代のイタリアでは、貨幣経済や各国間の交易によって、都市が人的また物的な面で拡大し、美的で視覚的な文化体験や娯楽の需要が高まった。この点については、新しい概念「感覚の都市」（The City of Senses）を提唱したDeFazio（2011）の近年の研究を参考にすることができる。都市の商業的發展により、人、サービス、商品などあらゆる種類の視覚的な素材が増大し、都市がより感覚的に、享乐的に、快適になった（DeFazio, 1-16 and 53）。<sup>1)</sup> こうしたイタリアの都市において、宮廷祭礼を構成する多様なスペクタクルな行事が行われ、それに伴い活発化した俳優の演劇活動は、都市の人々の精神文化的な経験を豊かにした。

Bertelli（146ff.）によれば、宗教的な行列、祝祭のパレード、馬上槍試合などは公共の場で行われていたが、宮廷の私的な領域では、饗宴、演劇、舞踏などの娯楽専用の空間が設けられ、私的で排他的な快楽の場として機能した。娯楽は、宮廷の外交政策と結びつき、次第に華麗で壮大な演出を強化した。都市構造に、見世物やショーの視覚的また文化的要素が組み込

まれると、劇場は次第に公共機関として政治化していった。そして俳優は都市間を移動し、演劇に関する普遍的な知識を広める文化媒体として機能したのである。

これに関して言えば、フランスの哲学者ミシェル・ド・モンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533-1592) が、自著『エッセー』 (*Les Essais*, 1580) の中で、俳優の影響力の拡大に言及していることに注目することができる。モンテーニュは都市の娯楽と結びついた俳優の文化的な役割を肯定的に見ており、中世より貶められてきた俳優の名誉を回復しようと試みた。ここでは下記の引用を確認する。

事実、私はこの娯楽を罪悪視する人々を、思慮を欠くものとして常に非難しました。また、わが国の諸都市に当然入ってくる価値ある俳優の人たちの入市をこばみ、民衆にこの公共の娯楽を与えるのを渋る人々を不正なものとして非難しました。(184: trans. 333)<sup>2)</sup>

旅芸人や俳優に対する差別や偏見があった時代において、モンテーニュは市民に娯楽を提供し、社会文化的なコミュニケーションを増大させる俳優に注目した。俳優は都市で人々に演劇体験を提供することで、貴族や庶民に関わりなく、様々な階級や国の人々と享楽を共有し、人々の文化的生活を豊かにした。俳優たちはコスモポリタンな存在として、市民社会の演劇空間におけるパフォーマンスを通じて、平和的でインタラクティブな文芸共同体を形成することに貢献したのである。

俳優の職業イメージが比較的向上したのは、演劇の大衆化だけではなく、その教育機能が評価されたことも一つの理由である。ルネサンス人文主義では、古典時代のクインティリアヌス (Quintilian) の『弁論家の教育』 (*Institutio Oratoria*) やプルタルコス (Plutarch) の『モラリア』 (*Moralia*) などの古典的な教育理論が知識階級の間でよく知られており、喜劇作品を含む文学や演劇を通じて彼らの教育思想が受容された。本稿で後述するように、貴族や知識階級の子供たちの修辞学教育に演劇が導入され、演劇の言語的また道徳的な教育効果が評価されたのである。

俳優が社会的また文化的アイコンとして徐々に登場してきたもう一つの理由として挙げられるのが、演劇に対する宗教的抑圧が弱まったことであ

る。こうした演劇に対する宗教観の変化については Rekatzky (2019) が分析しており、この先行研究をもとに、本稿の第4節でマルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) が喜劇の教育効果をどのように考えていたかという点を分析する。

俳優が演劇教育に関わるにつれて、俳優と貴族との間に個人的な接点が生まれていた。実際、貴族の中には演技術を学び、自ら俳優になる者もいた (第2節参照)。公私ともに誰もが舞台の上で俳優として活躍できる時代になり始めると、演劇は貴族教育の一環として肯定的に評価され、演劇に対する社会的な偏見も少しづつ弱まった。

本稿では、以上の導入を踏まえて、主に演劇教育の観点から、貴族や知識階級の言説に見られる俳優の肯定的な描写について検証する。第2節では、モンテーニュの思想やブレーズ・パスカル (Blaise Pascal, 1623-1662) とその姪のエッセイを中心に、フランス演劇の隆盛とともに発展したブルジョア社会における演劇教育の様相を分析する。第3節では、イングランドの演劇文化を取り上げ、トーマス・エリオット (Thomas Elyot, 1490-1546) の喜劇に対する高い評価と、フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) の演劇教育に対する提言を検討する。

第4節では、ドイツ語圏の同時代の人々に大きな影響を与えたコスモポリタンな哲学者であるロッテルダムのエラスムス (Erasmus of Rotterdam, 1466-1536) の教育論を考察する。さらに、エラスムスの人文主義の思想に触発されたルター、ルドルフ・ゴクレニウス (Rudolph Goclenius, 1547-1628)、そしてヨハン・アモス・コメニウス (Johann Amos Comenius, 1592-1670) の言説を、演劇の文脈における教育的意義や俳優の認識の変化を中心に検証する。

## 2. フランスの演劇文化の発展と貴族の子弟の演劇経験の拡大

16世紀以降のフランスにおける演劇文化は、イタリアの影響を受けて発展し、演劇の教育的な役割も拡大した (cf. 菅原 1973; 藤井 1995; Hubert 2008; Doudet 2018)。特に16世紀後半には、ヨーロッパの多くの学校の修辞学教育にて、生徒の修辞学の技術やラテン語能力の向上に演劇が導入された。この時期のフランスでは、パリの約30の学校がそれぞれ演劇の上演を行っていた (Coggin, 67)。

学校演劇について、モンテーニュは『エッセー』の中で興味深い見解を示している。この著書の第1巻第25章「子供の教育」では、モンテーニュは子供の頃に学校で優れた暗唱力を認められた経験から、貴族の子供に演劇教育を導入することを提言している。彼は12歳の頃の思い出を次のように語っている。

私はブカナンや、ゲラントや、ミュレのラテン語の悲劇で、主役を勤めたからです。[...]そして私は皆からラテン語悲劇の第一級の役者と認められていたのです。芝居は名門の子弟にもけっして悪くない遊戯だと思います。その後も私は、わが国の王侯方が自ら古代のある君主たちにならって、気高く、立派に、これに専心しているのを見ました。(184: trans. 333)

ここでは、モンテーニュが演劇的な実践に熱心であっただけではなく、貴族教育のための演劇教育が推進されていたことを理解することができる。Lanham (2f.)によると、ヨーロッパの貴族の間では、フィクションや歴史上の出来事を再現する修辞学を学ぶ伝統的な教育実践が重視されていた。演劇の役割練習の実践を通じて、子供たちは話術や生活様式を学び、対話における説得力を身につけた。さらに、Ferrari (19-32)は、こうした実践的な教育が実施された理由として、支配階級が、知識の伝達や制度の普及、また宣言や外交交渉などに、話術を用いる必要があったからとしている。モンテーニュが述べるように、貴族の子弟は演劇的な手法を用いた修辞学の習熟に熱心であり、それは公の名誉と富を得るための、貴族教育の中核を成すものであった。

モンテーニュは『エッセー』の中で、さらに市民の娯楽としての演劇の重要な役割についても述べている。

良い政治は、信仰の厳粛な儀式の場合と同じく、競技や遊戯にも市民を集めることに心をくばります。社会の融和と友好とがそれによって増加いたします。それから皆の前で、しかも支配者も見ている前でおこなわれる娯楽以上に、秩序ある娯楽を国民に与えることはできません。そこで私は、支配者や君主が自分の費用で、父親のような愛情と

親切から、しばしば国民に娯楽を与えるのは道理があることだと思います。(184: trans. 333f.)

モンテーニュは、支配者が演劇を含む娯楽について理解の精神を示し、それを促進することを提案している。また、他の箇所においては、こうした都市文化に楽しみをもたらし、文化的な官能性を増すことのできる俳優について、保護をするように提案している (ibid., 184)。モンテーニュにおいて、演劇が人心掌握の道具や、民衆のための道徳的機関として意義を与えられ、またスペクタクルの政治的また文化的な有用性が高く評価されていることは注目に値する。

そして16世紀から17世紀にかけて、フランスの文化政策に演劇が組み込まれたことで、貴族階級と演劇との関係が強化された。ルイ13世(1601–1643)時代の宰相であり演劇愛好家であったリシュリュー枢機卿(Cardinal Richelieu, 1585–1642)は、演劇の規制を制度化し、それを積極的に展開した。特に、王の栄光に奉仕する重要なジャンルとして重視されたのが古典悲劇であり、王権の神格化のために壮大なスケールで上演された。ルイ13世の勅令により、俳優や女優の不謹慎な行為が一切禁止されると(Pignarre, 90)、彼らの職業化が進み、有力なスター俳優を中心として安定した劇団が形成されていった(Viala, 63)。

貴族出身の名優フロリドル(Floridor)(原名: Josias De Soulas, Sieur(lord) De Prinefosse, 1608?–1671)(cf. Encyclopædia Britannica)がフランス演劇史に登場し、オテル・ド・ブルゴーニュ(Hôtel de Bourgogne)の劇団を率いていた。そして同時代のフランスでは、女優が女性の職業として初めて確立された(戸張, 24 and 28f.)。王侯貴族が頻繁に訪問していたパリの劇場は、繊細で洗練された嗜好を持つ上流階級の社交の場へと変化したのである。政府の演劇保護のもと、1680年にはコメディ・フランセーズ(Comédie-Française)が設立され、フランスの近世演劇が組織された。

フランス演劇が発展し、ブルジョワの社会文化に編成される過程のなかで、貴族の子弟のための教育論を執筆したパスカルの見解を、ここで参考にすることができるだろう。パスカルは『パンセ』(*Pensées*, 1670)の中で、演劇の影響力の大きさを述べている。

どんなものでも、あまり大きい娯楽は、キリスト教者の生活にとって

危険である。しかしこの世が考え出した数ある娯楽の中でも、喜劇 [i.e., *comédie*] ほどにおそるべきものはない。喜劇は、さまざまな情念を、きわめて自然に、実にこまやかにうつし出してみせるので、私たちの心の中に、そういう情念をかき立て、目ざめさせる。(597; trans. 369, 一部著者が改訳)

パスカルは、貴族の家系に生まれ、演劇を身近な娯楽として愛好した。パスカルの家族が子供の教育手段として演劇文化に親しんでいたことについて、パスカルの姪であるマルグリット・ペリエ (Marguerite Perrier, 1646-1733) の回想録には、次のように記されている。

演劇がことにお好きだったリシュリユー枢機卿さまが、児童劇をご覧になりたいと思立たれ、エギユイヨン夫人にその手はずをとのえてくれるように頼まれました。夫人は、バリ中で探しまわり、枢機卿さまをお喜ばせできるような子供たちを集めにかかられました。[...] こうして劇の上演が行われました。パスカル嬢はご自分の役柄を、驚くほどみごとに演じられましたので、非常な喝采を博されました。[...] ともなく、パスカル嬢は、その劇全体を通じ、だれよりもすぐれた俳優でした。(1094f.; trans. 94f.)

パスカルの妹は、リシュリユー枢機卿が見たがっていた子供の劇に抜擢され、見事な演技を披露した。パスカルの家族が子供たちの教育の場として演劇を導入したように、貴族階級の子供や若者にとって、演劇は単なる娯楽ではなく、重要な教育手段と考えられていた。演劇活動は、芸術的な娯楽として、役割練習や対話訓練を通じて、社会的スキルを身につける重要な方法であった。

このように、フランス式演劇教育が貴族教育に与えた文化的効果により、演劇はその地位を確立し、文化的な市民権を得ていった。リシュリユーの支援を受けたフランスの劇作家ジョルジュ・ド・スキュデリー (Georges de Scudéry, 1601-1667) は、彼の喜劇『コメディアン達の喜劇』(*La comédie des comédiens*, 1635) の中で、俳優の生き方や演劇観を示している。この作品の第二幕では、優れた俳優を定義する議論を展開し、肉体的にも

精神的にも高潔なインテグリティの高い個人である俳優を称賛し、このような俳優を、「哲学者の石」(la pierre Philosophe) (584) であり、または「完璧さのアイデア」(l'Idée de la perfection) (ibid., 589) になりうると主張している。

新プラトン主義において、スキュデリーは、俳優を世界に影響を与える完全性の体現者であると考えた。また、市民や庶民とは異なり、俳優は作者と観客を橋渡しする高貴な存在であり、作品の思想や普遍性を伝えるべきだとした。17世紀のフランス古典主義では、古代ギリシャの俳優に対する肯定的な見方が復活し、超地域的に活躍する俳優をコスモポリタンな存在として認識する基盤となったのである。<sup>3)</sup>

### 3. イングランドにおける喜劇を通じた貴族教育：道徳心の向上とエンバワメント

フランスの状況と同様に、イングランドでも16世紀頃から言語教育が強化され、古典を模範とした対話型の修辞学教育が進められた。文法学校でのラテン語学習熟は高く、学校では授業中に英語で会話することを、公に禁止していた (Astington, 39)。これに関連して、演劇教育が盛んになり、それは学校のカリキュラムに編成された (Coggin, 58)。文法学校では、ギリシャ語やラテン語の劇作品を演じることを奨励する学校劇が特に人気を博していた。

クインティリアヌスの教育思想の影響を受け、雄弁家になるには演説の技術を俳優から学ぶ必要があるとして、俳優は高い言語能力を持つ演説者と同様にみなされた (ibid.)。この世紀には、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学でも古典演劇の上演が盛んに行われ、演劇教育を通じた高い演説技術の効果が強調された (Boas, 26-68; Blank, 525f.)。エリート階級の子弟たちが悲劇や喜劇を演じることは珍しくなくなったため、将来の支配階級と演劇との関係がこれまで以上に密接になったことも、不思議ではない。

演劇教育の文脈では、ルネサンス期イングランドの学者であるエリオットの視点が検討に値するだろう。エリオットは支配階級の出身で、高い人文主義の教育を受けた。彼は、貴族階級の教育論を論じた自身の『知事の手帳』(The Book of the Governor, 1531) の中で、子供たちには音楽や舞踊、詩な

どの娯楽を行う能力が必要であることを強調している。また、それだけではなく、古典文学や演劇を通じて、彼らが優れたラテン語や修辞学を身につけると、道徳観が育つと評価している。次の引用文は、青少年教育における喜劇の有用性を述べた箇所である。

第一に、喜劇は、彼らが下品な言葉の教義であると考えていたが、間違いなく人間の人生の絵、あるいは、いわば鏡である。そこでは、悪は教えられるのではなく、発見されるのである [...]。これらの喜劇の中で最も雄弁に、また親しみを込めて示されている知恵、戒告（戒め）、助言、悪徳を戒めること、その他の有益な文章を思い出してみると、間違いなくそれらの中から少なからぬ果実が集められることになるだろう。(114)

道徳や人生経験の促進に喜劇が有用であるというエリオットの見解は、演劇教育が人間の人格や道徳心の育成に関連することに対応するものであり、これは学校や大学における演劇上演の大きな目的であった。教育的な演劇文化は、語学力や道徳の向上を目指し、国内外の学校演劇に幅広い影響を与えることになる (Coggin, 83)。

ヨーロッパでは、演劇が超地域的で文化的な影響力を及ぼすようになったことで、俳優と観客との双方の言語、道徳、倫理の向上が図られた。エリート層においては、演技の訓練は、公的な場における洗練された立ち居振る舞いやジェスチャーの形成に、役立つと考えられていた。また演劇全体が、民衆の教育媒体として評価されるようになると、俳優の肯定的なイメージが復活した。それに加え、エリザベス I 世 (Elizabeth I, 1533–1603) が演劇鑑賞を好んだことで、シェイクスピア劇団などの職業劇団が多く設立され、市民社会には演劇文化について寛容な雰囲気醸成されたのである。

イングランドの演劇文化については、この国の著名な哲学者であり貴族であるベーコンの視点を参考にすることができる。ベーコンは自身の著書『市民と道徳のためのエッセイ』(*Essays or Counsels Civil and Moral*, 1625) の第 37 節「仮面舞踏会について」の中で、貴族的で優雅なイングランドの仮面舞踏会を好むことを語っている (467f.)。さらに、ベーコンによると、上



流階級の子弟教育には演劇文化が導入されている。これは、第18節「旅行について」の中で、貴族の若者は国内の地域や外国を視察するべきであり、同じく喜劇も訪れるべきであるとのベーコンの次の引用に見受けられる。

旅行は、若い人にとっては教育の一環であり、年配の人にとっては経験の一環である[...]。見物したり観察したりしなければならないのは、王侯の宮廷、特に王侯が大使を謁見する時の宮廷、閉廷して訴訟が聞き取られる時の法廷、同じく協会の宗教法廷、教会や修道院[...]など、上流階級の人々が見に行くような喜劇[...]などである。(417: trans. 84-86)

特筆すべきは、喜劇は他の公的で重要な機関と同様に、貴族階級の子供たちが見るべき教育的な芸術の一つと考えられていたことである。これについて、あるエピソードを紹介することができる。ベーコンが12歳になったとき、両親はベーコンを世間知らずの哲学者ではなく、政治家として養成しようと考え、彼に修辞学の教育を施すことを決めた(Rothkamm, 89-92)。同年、ベーコンは、修辞学教育を展開していたケンブリッジ大学に入学している。そのため、ベーコンはこの大学の演劇を導入した修辞学教育の伝統に精通しており、読者に上記のような喜劇の鑑賞を推奨していたのではないかと推測される。ベーコンにとって、演劇鑑賞は子供が権威的存在になるための訓練に必要な道具であるだけでなく、自己の力と影響力を獲得するエンパワーメントに不可欠なプロセスである。

演劇は、貴族教育に組み込まれた教育的な娯楽として機能しただけではなく、子弟が話術を学び、社会的な規範や道徳に触れる機会を提供する教育ツールとして、人々に欠かせない社会文化的な影響力を持った。王政復古以降は、演劇は近代化され、政治文化的な施設として都市インフラに組み込まれることになる。

さらに、演劇の文化的また教育的な重要性という観点からは、イングランドの詩人ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-1674)の『教育論』(*Of Education*, 1644)の中で示された見解を挙げるができる。ミルトンは、古典的な教育観とキリスト教人文主義の教育観を融合させ、子供が最終的には英国紳士になるために、高貴な人格を形成することを目指した(杉本、

19f.)。ミルトンの『教育論』では、子供の教育に実践的な演劇手法を考慮した箇所は見られないものの、ギリシャの喜劇や悲劇は、暗唱や弁論のモデルとなり、また家庭学習にも役立つとして、大いに推奨している。

そのすぐあとで、しかし用心と矯正とを施しながら、ギリシャ語、ラテン語、あるいはイタリア語の精選された喜劇を味わわせるのは良いことであろう。また、家計の問題 [Houshold matter] を扱っている悲劇の中でも、『トラキスの女』、『アルケステイスの女』、及びそのたぐいのようなものでもよい。(285 : trans. 22)

前述したように、イングランドでは、対話的な言語学習に重点を置いた演劇教育が学校に導入されていた。だが、それは未だにレトリックの習熟や文法学習に偏重していた。ミルトンは、そのような暗記中心の教育ではなく、より遊戯的に演劇作品を暗唱し学習する方法を推奨した。これには、同時代のイングランドで受容されていたコメニウスの直観的教育法の影響もあった。

このようにして、イングランドでは文学だけではなく演劇も教育に導入されるようになると、文法学校での演劇上演の文化慣習が定着した。この点において、教育と権力構造との関係を論じた Bourdieu (479-525) の分析が参考になるだろう。Bourdieu は、特権階級が支配的な地位を占めるための方法や手段を研究し、それを経済的また文化的な資本である世襲財産を実行し維持するための重要な「再生産戦略」とであると定義した。とりわけ教育投資は、特権階級の権力の確立と維持に不可欠で重要な戦略として認識されており、彼らは子弟に私的で保護されたエリート教育を実施することで、子供たちを自らの財産管理システムに統合するのである。そしてこのような支配階級の権力の再生産と維持のための教育システムに演劇が導入されると、俳優と貴族との政治的また文化的な結びつきが深化し、それに伴い、俳優の社会的地位の向上や、彼らの権威的な人物への変貌が、後押しされていくことになる。

#### 4. 俳優の教育的貢献：コスモポリタンな人間性の完成を目指して

16 世紀のヨーロッパでは、ルネサンス人文主義に基づく子どもの教育

が盛んであった。具体的には、古代ギリシャで理想とされた人間性の完成を目指す人間中心主義の思考が強調され、人間性の陶冶を通じて個人の精神的また文化的な完成を目指す教育が実施されたのである。

ルネサンスの人文主義者エラスムスは、この運動の中心人物であり、プラタルコスの『モラリア』などの古典的な教育論を受容したが、そこから発展させた彼の教育観は、同時代の知識人に多大な影響を与えた。エラスムスは祖国オランダを離れた後、フランス、イングランド、イタリア、ドイツなどのヨーロッパ各国を旅して暮らし、現地の多くの知識人と交流した。エラスムスはルネサンス期に影響力を及ぼしたコスモポリタンな哲学者であり、国家間の平和のためには、市民教育と大衆への啓蒙が何よりも必要であることを唱えたのである。

エラスムスは1530年に発表した自身の『子供の作法について』(*De civilitate morum puerilium*)を始めとする教育論を発表し、ヨーロッパの上流階級の人々に、すぐに受容された。また、彼の教育論文集『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生から直ちに行う、ということについての主張を主題として集約した論説』(*Declamatio de pueris ad virtutem ac literas liberaliter instituendis idque protinus a nativitate*, 1525)は、良書や文学を通じた子供の教育の必要性を説いており、ここで考察する価値があるだろう。エラスムスは、この著書において、あらゆる人々の子供たちを平等に尊重する人間教育のあり方について記しており、その文章の中で、道化や喜劇を従来になく肯定的に評価している。次の一節は、遊戯的な寓話に教育的効果を見出した箇所であり、喜劇と結びつけられている。

しかし、さらに言いますと、田園詩の歌・・・これほど優美なものはあるでしょうか。喜劇よりも魅力的な物は他にあるでしょうか。喜劇は、道徳の本質に基づくもので、無学の者や、子供に対して刺激を与えることになる。しかし、このようなことで、非常に多くの哲学の事柄が遊び戯れを通して教えられることになるのではないのでしょうか。(510: trans. 91)

エラスムスは、幼少から文学を通じて善悪の観念を教えることで、子供たちを悪徳の習慣から守る必要があると考えた。彼は自身の論考の中で、多

くの古典時代の作家の名前や作品を挙げている。そして、ウェルギリウスやアリストファネスに言及しながら、この時代の田園詩や喜劇は、人間の完成を導く道徳的な題材が豊富に含まれており、教育的な効果があると考えた。子供たちは、このような文学教育を通じて、遊戯的また快適に最良の習慣を身につけることが期待されたのである。

また、エラスムスは「morione nugari」、つまり「愚者」や「道化師」と戯言を交わすことに、肯定的な教育効果を見出していたことが、次の一節に表れている。

厳格な気質の者は、子供たちの間にあつて無駄口をたたくようなことには不快さを感じることでしょう。しかし、同じ人が、時折は、マルタ産の子犬とか尾長猿とかと遊び戯れたり、カラスやオウムとおしゃべりをしたり、道化師 [morione nugari] とつまらぬ話をする事などに一日の大半を費やしても不快だとは感じないし、恥ずかしいとも思わないのです。このような愚にもつかないことが非常に真面目なことを活発にさせるのです。尊敬されるべき人々がそのようなことに面白みをあまり見つけだせないということは驚くべきことです。それは、敬虔や豊かなる成果への希望とによって、そのもの自体では苦いものである事柄に楽しさを与えることになるのです。(512: trans. 100)

上述の引用には、エラスムスの普遍的で人間主義的な教育方法が反映している。中城 (141) はこの箇所を、エラスムスの遊びや娯楽を通じた学習方法であると解釈している。エラスムスは、厳格なスコラの教育のプロセスではなく、自然で能動的な子供向けの学習方法として、喜劇の遊戯的な教育の利点を奨励した。エラスムスの喜劇や道化師に対する好意的な評価は、彼の有名な『痴愚神礼讃』(Stultitiae Laus, 1511) にも見受けられる。彼は、喜劇や道化が、子供の楽しい学習過程を促進するだけでなく、子供の道徳的な性格を形成し、悪を防止するという実用的な教育上の利点を挙げているのである。

エラスムスの新しい人文主義的教育法が普及したことに加え、すでに述べたように、演劇教育の導入が拡大していたフランスやイングランドの知識人の演劇や俳優に対する肯定的な認識が、ドイツ語文化圏にも大きく影

響した。これにより、学校での演劇教育の推進が特に進んだのである。学校劇やイエズス会劇は、ラテン語教育の一環として、子供たちの教育や道徳観の向上を担うだけではなく、文化的な豊穡さをもたらす役割を果たすことで、さらに発展した。イエズス会劇は、1560年から1570年にかけての同会の発展に伴い増加し、都市全体のイベントとなった（Müller, 8）。

この点において、プロテスタント教育でも、ルターが学生に喜劇を演じさせる演劇教育を推奨していたことを、併せて検討する必要がある。中世以降、ヨーロッパの宗教では、精神と肉体を別々に表現する演劇作品の二面性が問題視されていた（Rekatzky, 57）。しかしながら、ルネサンス期になると、演劇が芸術と結びつき、演劇への反発や抑圧が部分的に弱まった。ルターの時代になると、ルター派の牧師ヨハネス・ブゲンハーゲン（Johannes Bugenhagen, 1485-1558）など一部のプロテスタント神学者によって、学校劇が言語や礼儀作法の学習や、記憶の洗練に役立つものとして推奨されるようになる（ibid., 60）。このような宗教的傾向の中で、ルターは喜劇の教育効果を次のように見出している。

学校に通う少年たちのためにも、喜劇の上演を妨げるのではなく、ラテン語の練習をさせることを許し、許可すべきである。その一方で、喜劇ではそのような人物を人為的に考え出し、描き、表現することで、人々を指導し、そして召使、主人、若い職工、老人にふさわしい自分の職能と地位を思い起こさせ、諭すべきである [...]。（431）

ルターは、喜劇を上演することの教育効果を述べ、人々の啓蒙にも貢献する喜劇の意義を説明した。また、彼は同時代のエラスムスの肯定的な喜劇観に通底するような、喜劇の教訓的な内容とその教育的また道徳的な効果を強調したのである。ルターは、ルネサンス期の人文主義の影響を受けて、喜劇を人間の完成を高める訓練であると同時に、喜劇の上演に伴う様々な役割練習を通じて、あらゆる階層の人々を理解し、道徳的な市民になるための機会であると考えた。

そして、演劇教育が拡大するに連れて、学問的にも演劇の効果を評価する言説が生まれたことは、興味深い。マールブルク大学の哲学者ルドルフ・ゴクレンウスは、自身の著書『倫理学演習』（*Übungen zur Ethik*, 1592）の中で、

学生演劇や、統治された共同体での悲劇や喜劇の上演は、演説術などを向上させる修辞学の教育効果があると述べている (Goclenius, 295)。実際、ゴクレニウスは俳優を修辞学の教師として扱うことを表している。このことは、彼の『倫理学演習』の次の引用に見受けられる。

舌の迷いについても、デモステネスのように間違いをなくし、正しい話し方の全体をマスターしたいと考えたならば、しばしば本格的な舞台作品に参加するべきであり、暗記の努力を厭うべきではない。そのことは素晴らしい方法で、豊かな実りをもたらすだろう。優れたスピーチの科学の部分において、教師が俳優の助けを求めたことがあったのは、偶然ではない。(295)

ゴクレニウスは、学術的な修辞学教育における演劇の効果と俳優の役割を重視した。俳優が自身の演劇的また修辞的な技巧をもって、知的エリートの子弟を教育することで、この知的階級との関係性が生じたことは否定できない。そして同時期には、ドイツ語圏の宮廷権力は、フランスやイタリアの宮廷文化を模倣した壮大な政治的また文化的な祭典や演劇を催すことで、拡大していた。俳優は宮廷権力や知識階級と結びつき、中世以来、教会が推進してきた否定的な社会的地位や認識を、徐々に脱していたのである。

学校演劇の観点から、少し後の時代の演劇と教育の関係についても検討したい。チェコの教育学者であり哲学者であるコメニウスは、彼の名高い教育書『パンパイディア』(*Pampaedia*, 1935年発見)を著している。コメニウスは、三十年戦争の悲惨な経験から、「*Omnes omnia omnino*」という汎知主義の思想を展開した。これは、すべての人々のための教育概念であり、あらゆる物事をあらゆる方法で教え、人々を理性的な人間に教育することで、最終的に世界平和を達成するという教育理念である。

コメニウスの思想では、演劇は言語能力の向上や、知識の普及、そして平和思想の実現に向けた重要な教育的また文化的な媒体であった。この思想の下で、コメニウスは、遊戯的で楽しい学習方法を統合した演劇的な教育概念を考えたのである (cf. Monroe [c1900] 1971; Mahnke 1931; Kožminová 1989; 井ノ口 2001; 北爪 2015)。この概念は、コメニウスの教育理念と演劇

の台本を組み合わせた戯曲『遊びの学校』(*Schola Ludus*, 1656)にも反映している。この戯曲の序論にて、コメニウスは次のように述べている。

誰もが自分の学校で、無為な観客として認められるべきではなく、すべての人が、生き生きとした役者 [omnes vividi actors] になるべきであり、自分の教師や仲間の学生が演じているのを見て、何でもするべきである。(830: trans. 9)

コメニウスは、生徒が観客と俳優の両方の役割を担うことを期待した。演劇は、生徒の自主精神と知識を育成し、遊戯的精神を促進するための有用な教育手段として考えられていた。しかし、コメニウスだけではなく、少し前のルターのような高名な神学者が、当時の宗教的状况において、すでに喜劇への寛容な態度を示していたにもかかわらず、生徒の喜劇の上演については、世間で受け入れられない場合が多々あった。

この文脈においてコメニウスは、神学者が学校や都市から喜劇を追放していることを嘆き、そうした考えは時代遅れであり、理解できないものだと批判した (ibid., 833: trans. 14)。コメニウスは、神学的に否定される喜劇のイメージを払拭するため、学校の責任者や王族や聖職者などを、生徒の演劇公演に招待することを提案し、そうして「不敬な喜劇の仮面さえも取り除かれる」ことを期待した (ibid., 835: trans. 19)。コメニウスにとって喜劇とは、平和という普遍的でコスモポリタンな思想を広げ、学生の個人の育成を促すことのできる教養ある媒体であったのである。

コメニウスと比較して、この時期の17世紀の哲学者スピノザの権力者と演劇の関係についての見解を検討したい。スピノザは、自身の『国家論』(*Tractatus Politicus*, 1677)の中で、支配者のあり方を定義しており、支配的立場にある者が舞台上で俳優として演じることは、不適切であると主張した。

思うに、統治権を握る人あるいは人々にとっては、酔って、裸で、遊女とともに町を歩き回ったり、俳優のまねをしたり、自らの定めた法律をあからさまに破ったり軽蔑したりして、それでいて威厳を保持することは不可能である。(Engl. trans. 303: trans. 53)

スピノザの教育観によれば、学生は自分と世界に対する理解を深めることで自分の存在意義を高め、それによって徳を上げて力を得る (Dahlbeck, 39)。このような彼の教育観に基づけば、自己保存と自己啓発のために、舞台上で俳優として演技する君主のパフォーマンスは、不道徳として認識され、共同体の支配者として自身のエンパワーメントに反するものとみなされた。このスピノザの見解に示されるように、一部の知識人が俳優に対して軽薄で不道徳な人間像をいまだに抱いていたこの時代に、コメニウスが知的階級の子弟に舞台での演技を勧め、演劇体験を非常に高く評価していることは注目に値するだろう。

17世紀末から18世紀にかけて、コメニウスの時代の世俗的また貴族的な教育思想は、次第に経験的で個人主義的な教育思想へと移行した。例えばドイツの哲学者ライプニッツは、コメニウスの自然な教育思想の影響を受けて、王子たちに演劇の手法を導入するという遊び心のある楽しい教育思想を展開することになる。<sup>4)</sup>

## 5. 結論

ルネサンス期の貴族や知識人は、宗教的に後ろ向きのイメージを負わされていた演劇に対峙し、その社会的また文化的な豊かさを支えた。また、悲劇や喜劇の上演を通じて、演劇や俳優の教育的で道徳的な貢献を示したのである。アウトサイダーとして市民社会から排除されていた俳優たちは、宮廷権力者や裕福な市民と結びつき、その文化的権威を高めていった。一方、イタリアのコメディア・デラルテやイングランドの職業俳優団の発展により、それらの周辺国でも演劇が受け入れられるようになった。俳優たちは、国境を越えて多くの人々と感動や笑いを共有し、都市の文化生活や演劇の享楽や文化的な豊かさを生み出したのである。

俳優たちは、人々の文芸的で超域的なアイデンティティの形成に関わり、他の職業人では代替できない文化的また平和的な生きた媒体となった。俳優の国境を越えた商業活動に伴う人々の文化的統合は、商業的な交易活動が世界平和の契機になるという18世紀の啓蒙主義的なコスモポリタニズムの理論の実践的なモデルであるといえる。

さらに、貴族や知識人の子弟を対象とした演劇教育の文化が、この有利



な演劇現象を発展させて支えた。貴族や市民は、俳優として様々な国籍や身分の人々の役を舞台上で演じ、それを学び、理解するという演劇的経験を積んだ。これは、特権階級の演劇体験を豊かにするとともに、他国の演劇文化を受容し、トランスナショナルで共通の演劇の文法や構造、演劇的な身体性である身振りや表情、立ち姿などを理解するための、重要な基盤となったのである。

## 注

- 1) 「官能の都市」については、Low (2015) の研究も、同じく参照することができる。Low は、都市に溢れる多様な感覚のみならず、都市の成長に対する人々の関与について、感覚がどのように媒介するかについて、感覚の方法論を含めて分析した。
- 2) 原文の日本語訳については、筆者が作成した訳か、既存の訳を用いた。既存の訳文については、原文のページ番号の横に「trans. ページ番号」という形式で記載した。一部の箇所では日本語訳の表現を変えた。
- 3) コスモポリタンの存在としての俳優のテーマについては、著者の論考 (Yamazaki 2019) で論じた。
- 4) ライブニッツの教育思想については、cf. Moog 1967; Riley 1998; 山崎 2020

## 謝辞

本研究は、科研費 (18K00487) (19K00487) および日本大学商学部の研究費の助成を受けた。

## 参考文献

- Astington, John H. (2010) *Actors and Acting in Shakespeare's Time: The Art of Stage Playing*, Cambridge UP
- Bacon, Francis (1963) "Essay on Consels Civil and Moral," id., *The Works of Francis Bacon* VI, eds. J.Spedding et al., reprint of the facsim.ed., Frommann-Holzboog, 365-518
- (1984) 『ベーコン随想集』 渡辺義雄訳, 岩波書店

- Bertelli, Sergio (2006) 『ルネサンス宮廷大全』川野美也子訳, 東洋書林
- Blank, Daniel (2017) “Actor, Orators, and the Boundaries of Drama in Elizabethan Universities,” *Renaissance Quarterly* 70, 513-547
- Boas, Frederick S. (1978) *University Drama in the Tudor Age*, Arno Pr.
- Bourdieu, Pierre (1996) *The State Nobility: Elite Schools in the Field of Power*, trans. in English L.C.Clough, Polity Pr.
- Camillo, Giulio (2009) 『劇場のアイデア』足達薫訳, ありな書房
- Coggin, Philip A. (1956) *Drama and Education: An Historical Survey From Ancient Greece to The Present Day*, Thames and Hudson
- Comenius, Johann Amos (1657) “Schola Ludus,” id., *Opera Didactica Omnia*, Laurentii de Geer, 830-1062, <https://www2.uni-mannheim.de/mateo/camenaref/comenius/comenius1/p3/jpg/s468.html> (accessed May 9, 2021)
- (1992f.) 『遊戯学校』(Schola Ludus) 藤田輝夫訳, 私家版
- Dahlbeck, Johan (2017) *Spinoza and Education: Freedom, Understanding and Empowerment*, Routledge
- DeFazio, Kimberly (2011) *The City of the Senses: Urban Culture and Urban Space*, Palgrave Macmillan
- Doudet, Estelle (2018) “Introduction,” Marie Demeilliez et al. (eds.), *European Drama and Performance Studies: Le Théâtre au collège* (2018-2, n.11), Classiques Garnier, 11-25
- Elyot, Thomas, Sir (1969) *Sir Thomas Elyot's The Book Named the Governor*, Teachers CP
- Encyclopædia Britannica (2021) “Art. Floridor,” *Encyclopædia Britannica*, <https://www.britannica.com/biography/Floridor> (accessed November 15, 2021)
- Erasmus, Desiderius (1961) “Pueros ad virtutem ac literas liberaliter instituendos, idque protinus a natiuitate, declamation,” id., *Opera omnia, emendatiora et avctiora*, recognovit J.Clericus, I, 489-516
- (1994) 「子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生から直ちに行う, ということについての主張を主題として集約した論説」『エラスムス教育論』中城進訳, 二瓶社, 6-145
- Ferrari, Monica (2015) “L'éducation du prince par les arts du discours au XV<sup>e</sup> siècle: l'

- oratio* comme outil de formation et jeu de regards à la cour de Francesco Sforza,”  
*Histoire de l'éducation* 143, 9-36, <https://doi.org/10.4000/histoire-education.3128>  
 (accessed November 15, 2021)
- 藤井康生 (1995) 『フランス・バロック演劇研究』 平凡社
- Goclenius, Rudolph (2010) *Übungen zur Ethik: Exercitationes Ethicae*, intro. and trans.  
 in German H.G.Zekl, Königshausen & Neumann
- Hubert, Marie-Claude (2008) *Les grandes théories du théâtre*, 2nd ed., A. Colin
- 井ノ口淳三 (1998) 『コメニウス教育学の研究』 ミネルヴァ書房
- 北詰裕子 (2015) 『コメニウスの世界観と教育思想：17世紀における事物・言葉・  
 書物』 勁草書房
- Kožmínová, D. (1989) “Comenius’s Concept of the Play,” Marie Kyralová et al. (eds.),  
*Symposium Comenianum 1986: J. A. Comenius’s Contribution to World Science and  
 Culture, Liblice, June 16-20, 1986*, Academia, 129-133
- Lanham, Richard A. (1976) *The Motives of Eloquence: Literary Rhetoric in the  
 Renaissance*, Yale UP
- Low, Kelvin E.Y. (2015) The Sensuous City: Sensory Methodologies in Urban  
 Ethnographic Research, *Ethnography* 16.3, 295-312
- Luther, Martin (1912) “Von Comödien. Tischrede 867,” id., *D. Martin Luthers Werke.  
 Kritische Gesamtausgabe, Tischreden 1531-46*, 1, H.Böhlhaus Nachfolger, 430-432
- Mahnke, Dietrich (1931) “Der Barock- Universalismus des Comenius. I. Die „natürliche“  
 Pädagogik,” *Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts* 21, 97-  
 128
- Milton, John (1993) “Of Education,” id., *The Works of John Milton* 4, ed. A. Abbott, Hon-  
 no-Tomosha, 275-291
- (1984) 『教育論』 私市元宏 / 黒田健二郎訳, 未来社
- Montaigne, Michel de (2007) *Les Essais*, eds. Jean Balsamo et al., Gallimard
- (2015) 『エッセー』 原二郎訳, 岩波書店
- Monroe, Will Seymour (1971) *Comenius and the Beginnings of Educational Reform*,  
 [c1900], Arno Pr.
- Moog, Willy (1967) *Geschichte der Pädagogik 3. Die Pädagogik der Neuzeit vom 18.  
 Jahrhundert bis zur Gegenwart*, new ed. Franz-Josef Holtkemper, Henn et al.

- Müller, Johannes (1930) *Das Jesuitendrama in den Ländern deutscher Zunge vom Anfang (1555) bis zum Hochbarock (1665)*, Benno Filser
- 中城 進 (1994) 「訳注」, D・エラスムス『エラスムス教育論』二瓶社, 114-144
- Pascal, Blaise (1963) “Pensées,” id., *Oeuvres complètes*, Seuil, 493-641
- (1982) 「パンセ」(田辺保訳)『パスカル著作集 7』教文館
- Périer, Marguerite (1964) “Mémoire sur Pascal et sa Famille,” Blaise Pascal, *Œuvres complètes*, ed. J.Mesnard, Desclée de Brouwer, 1090-1105
- (1980) 「パスカルとその家族の思い出」(田辺保訳)『パスカル著作集 1』教文館
- Pignarre, Robert (2005) 『世界演劇史』岩瀬孝訳, 白水社
- Plutarch (2008) 『モラリア 1』瀬口昌久訳, 京都大学学術出版会
- Rekatzky, Ingo (2019) *Theater, Protestantismus und die Folgen: Gänsemarkt-Oper (1678-1738) und Erster Hamburger Theaterstreit*, Leipziger Universitätsverlag
- Riley, Patrick (1998) “Leibniz as a Theorists of Education,” Amélie Rorty (ed.), *Philosophers on Education. New Historical Perspectives*, Routledge, 192-208
- Rothkamm, Jan (2009) *Institutio Oratoria: Bacon, Descartes, Hobbes, Spinoza*, Brill
- Scudéry, Georges de (1974) “La comédie des comédiens,” *La Commedia in Commedia: testi del Seicento francese*, Bulzoni, 561-655
- 菅原太郎 (1973) 『西洋演劇史』演劇出版社
- 杉本誠 (1986) 「ミルトンの教育観」『城西大学女子短期大学部紀要』3.1, 19-27
- Spinoza, Benedictus de (1958) “Tractatus Politics,” id., *The Political Works: The Tractatus Theologico-Politicus in Part and the Tractatus Politicus in Full*, ed. and trans. in English A.G.Wernham, Oxford UP, 256-446
- (2012) 『国家論』畠中尚志訳, 岩波書店
- 戸張規子 (1998) 『フランス悲劇女優の誕生: パリ・宮廷の華』人文書院
- Viala, Alain (2008) 『演劇の歴史』高橋信良訳, 白水社
- Yamazaki, Asuka (2019) “Actors and Their Cosmopolitan Existence,” Alison Lewis et al. (eds), *Cosmopolitan Imaginings/Kosmopolitische Gedankenwelten*, Königshausen & Neumann, 75-87
- 山崎明日香 (2020) 「ライブニッツの王子教育論におけるレトリック教育について」『ライブニッツ研究』6, 123-142